

メイドから
母になりました 5

夕月星夜
Seiya Yuzuki



RB

レジーナ文庫

登場人物 紹介

クロッズ子爵

ジルの生家、
クロッズ子爵家の
当主。

カーディナル

禁忌に手を染めて
追放されたはぐれ魔法使い。
少年に見えるが、
レオナルの先輩に
あたる。

王太子

前のリリーの雇用主。
清濁併せ呑む
やり手の美青年だが、
なんだかんだ優しい。

ジェイド

ある事件の
被害者として
保護された少年。
賢く、強い魔力を
持つ。

ミリス

レオナルと契約する
水の精霊。
リリーの良き理解者
でもある。

シド

レオナルと契約する
闇の精霊。
レオナルの相棒的
存在ながら、
リリーに想いを寄せる。

レオナル

ジルの養父で、リリーの^{あるし}主。
凄腕の魔法使いだが、
黒髪に生まれたため
幼い頃は恐れられていた。
リリーのことが好き。

ジル

レオナルの養女。
幼いながら見習い魔法使い
として活躍しており、
時折芯の強さを見せる。

リリー

異世界に転生した元女子高生。
レオナルに頼まれ
ジルの『母親役』となった。
ある事情から恋をしないと
決めていたが……？

目次

メイドから母になりました 5

外伝 特別な大好き

書き下ろし番外編

昼食は友人と共に

7

329

355

メイドから母になりました
5

一 春を告げる花の如く

華やかな色は、自分には似合わないと思っていた。

普段好んで着るのはモノトーンや暗い系統の色が多い。汚れが目立たないし、なににより着ていて落ち着いた。

でも今、鏡に映る私が着ているのは、綺麗な海の青。幅広くとられた腰の部分と下のスカートは少し濃い青だけれど、それでも普段着ている色よりは明るめだ。

あとはなめし革の黒い華奢な靴。アクセサリーは控えめに、銀のネックレスとイヤリング、それと髪を結わえるリボンだけ。ああ、もちろん普段つけてる腕輪もね。

ネックレスとイヤリングは私の名前と同じユリの花を模した銀細工で、成人祝いでお母さんが贈ってくれた大事なもの。そこまで高価ではないけれど、銀でできているからお手入れには気を遣わなきゃいけない。それもあつてつけることはなかったんだけど、今日は特別。

うん、はつきり言って、いつもよりかなり思い切った格好だと思う。

「やっぱり、ちよつとやりすぎたかな……」

鏡の中でへにやりと笑う私は、濃い茶色の髪に同じく茶色の目をした、地味な顔立ちだ。

色合いだけ見れば思ったより似合うけれど、やはりこういった華やかな服を着るのには抵抗がある。

思い返すと前世でも濃い色や暗い色ばかり着ていたから、友人やおしゃれ好きだった妹にも小言を言われたつけ。私とは反対に明るい色や淡い色を好んだ妹を、当時の私は眩しいような羨ましいような気持ちで見ていた気がする。

デートに行く時には『私の服貸すから！』とピンク色の可愛いセーターを押しつけたこともあったなあ。

そう、私には前世の記憶がある。

当時女子高生だった私は、神々のいさかいに巻き込まれて命を落とした。

そのお詫びとして、この世界に転生することになったのだ。

記憶をそのままにしたのは、異世界への転生と同時に提示されたもう一つの案——
体に一生ものの傷を抱えながら生き返ることを選ばなかったから。

母が亡くなり、父一人で私と中学生の妹と小学生の弟を養っていた我が家は、裕福とは決して言えない暮らしをしていた。それをわかっていて、重い障害を残しながら生き返るという選択はどうしてもできなかった。

そんな選択をしたってみんなが知ったら、きっと怒るとわかっていたけれど。

私が願ったのは、残された大切な人たちの幸せ。それを聞き入れる代わりに、神様は私に記憶を残してくれた。覚えていなければ、意味がない願いだからと言って。

それは私にとっても都合がよかった。

当時、私は従兄のお付き合いをしていて、将来を誓い合っていた。なのに生き返る道を選ばなかったのは、共に生きようと言ってくれたあの人を裏切ることになって、せめて忘れずに想い続けることが唯一の贖罪になるのだと考えていた。

だから生まれ変わった私——リリー・ルージャは恋をしないと決めていた。

あの人以上、誰も愛さないと決めていた、だけど。

「こんな風に笑える日がくるなんて、思ってもみなかったな」

愛おしくて、同時にとても切なくて。

これまでの私は、宝物を眺めるようにあの頃を思い出すことはあっても、同時に押し寄せる罪悪感で、笑うことなんてできないでいた。

それが今は、とても自然に微笑んで思い出すことができる。

ああ、こんなことがあったな、あんなことを言われたなと、懐かしさに笑うことができる。

心が軽くなったような不思議な感覚にまた笑って、私は櫛を手にとった。

どうしてこんな風になることができたのか。

それは、自分の中で折り合いがつけられたからだ。

忘れない、忘れたくない。

それでも、その気持ちを胸に抱いたまま、私は過去の『私』ではなく『リリー・ルージャ』として生きている。

私にとって、前世は大切なもので、私の思考は前世の経験によって培われたものが多い。

そんな私を、丸ごと受け入れてくれた人がいた。

過去に囚われた私のままでいいのだと、言ってくれた人がいた。

今まで前世のことは誰にも言うつもりがなくて、ずっと隠し続けていた。

はつきり言って、隠しごとのある人間を、普通は信用しづらいと思う。

それが雇い主と使用人の関係ならなおさら、信頼関係は作りにくい。

でも、それでもいいと言ってもらえた。いつだって向けられるのは信頼と親愛で、この人に隠しごとをしたくないと、彼のまっすぐな感情に、私も応えたいと思った。

そうして打ち明けた前世ごと私を受け入れてもらえて……気づいた時には、もう遅かった。

とっくに育ってしまった好意。そばにいとる感じる安らぎ。

共に生きたいと願ってしまう、この想いに名をつけてしまったら終わりだと、そう思った時点で本当はわかっていた。

それなのに過去の自分を否定もできずうだうだしていた私に、彼はいつだって好意と共に、逃げ道を用意してくれた。

自分の気持ちを明らかにしながらも、最後の一步だけは踏み出さないで、逃げ出すことを私に許してくれた。

その優しさに、惹かれずにはいられなかった。

そして私は、神様がくれた奇跡に出会った。

あの人が、前世で恋した従兄が、この世界に転生していたのだ。

神様は約束を守り、前世の彼は幸せな生涯を送った。そして神様に願って、記憶を

持ったまま私がいるこの世界に転生したのだという。

私を案じてここまで追いかけてきてくれたあの人は、『幸せになっいいんだ』と言ってくれた。

だから、私は笑って言うことができた。

『一緒に幸せになりたい人がいるの』

私の中でとっくに出ていた答え。ごまかして、気づかないふりをしていた気持ち。それをさらりと口に出せるほど、私は吹っ切れていた。

誰に認められなかったとしても譲れない想いが、いつからか私の中に宿っていた。「ちゃんと言うって、決めたんだから」

まとめた髪をドレスと同じ青いリボンでくくり、言い聞かせるように口にする。

この世界ではじめてのハーフアップ。いつものようにきちんと結い上げるのではなく、上半分だけを結んだこの髪型にしたのも、私なりの決意だ。

髪を下ろした無防備な姿は、あまり見られたくないと思っていた。

元々メイドとして仕事するのにきっちりまとめることが多かったこともあって、仕事を始めてから自室以外で下ろすことはほとんどなかったけれど、今日は特別。

そうしてできあがった私は、鏡で見る限りいつもと大きく雰囲気異なっている。

個人的には可愛らしすぎるような気もするけれど、うん。

「今回だけ、こうでもしないと勇気出せそうにないかもだし……」

さすがにがつり化粧はしないけれど、リップクリームくらいは塗^ぬっていく。ほんのりと薄く色づくリップは、前にロザンナさんやミスと買い物した時^{みくろ}に見繕^{みくろ}ってもらったもの。二人に似合うと言ってもらったことを思い出せば、背筋も伸ばせる、はず！

よし、と気合を入れて部屋を出る。

これから昨日の事件のことで城に向かうのだけれど、ジルは急ぎの呼び出しで先に行っている。私は報告書をまとめているレオナルド様と一緒に行くから、待っている間にこうして着替えて……

「い、一緒に行くんだよね……」

う、どうしよう。緊張してきた。

鏡の前で散々自分に言い聞かせて、前に進むための言い訳もたくさん用意して、なのはまだ緊張するとか。

いやでもだって仕方ないじゃない、前世今世合わせても男の人と付き合ったのなんて一人だけだしそれも向こうから言われたし、私から、告白するとかはじめてなんだ

から！

「あら、リリー？」

「きゃあああああ!？」

ネックレスをぎゅっと握って落ち着こうとしていたら、突然声をかけられて驚きに悲鳴^もが漏^もれる。

びっくりしすぎて浮かんだ涙を指で拭^{ぬぐ}いつつ振り向くと、同じようにびっくりした様子のミスがいた。

月明りが揺れる水面のような、不思議な煌^{きら}めきを宿す水色がかった長い髪。今日は白く泡立つ波のようなフリルがついた水色のワンピースをまとっている。

最近可愛い服を着るようになって、ますます美少女ぶりに磨きがかかっている彼女は、レオナルド様が契約する精霊さんの一人で、私の親友でもあった。

「驚かせてしまったみたいですね」

「う、ううん。こっちが勝手にびっくりしたただけだから」

慌^{あわ}てて首を振る私を、ミスは青い瞳でじっと見つめる。

ど、どうなんだろう。黙ってるってことは、やっぱり似合わないとか？

もしもじしていると、なにかを納得したらしいミスが、眩^{まよ}しいほどの笑顔になった。

「雰囲気が違うと思ったら、髪を下ろしていらしたのね」

「へ、変かな？」

「いいえ、そのドレスもよく似合っていていらっしやいますし、髪形と相性がいいと思いますわ……あの、ちょっと失礼しても？」

「なあに？」

どこかにごみでもついていたかな、と伸びてくる手を見ていたら、なぜかそのまま抱きつかれた。

「可愛いですわー！」

「え、ちょっとミリス？」

「この服、前に私とマスターと買いに行った時のですわよね？　いつ着た姿が見られるのかと、楽しみにしておりましたの。よく似合ってますわ！」

私を放してにこにこ微笑むミリスを見ていたら、肩の力が抜けるのがわかった。似合うって言ってもらえるの、やっぱり嬉しいよね。

「よかった。こういう色を着るの、本当にドキドキしてたから」

「大丈夫ですわ、自信を持ってください。きつとマスターも可愛いと言うと思いますわ！」

多分ミリスからしたらなにげない一言だろうけど、カッと頬が熱くなる。

言って、もらえるだろうか。レオナルド様に、可愛いって。

「あ、マスターー！」

ミリスの呼びかけにドクンッと心臓が跳ねた。

私の肩越しにミリスが笑いかけている。ということは、間違はなくレオナルド様が後ろにいる。

振り向くのが怖いなんてはじめてだ。でも、この格好をしたのは。

「……リリー？」

勇気を出して振り向いて、でも視線を上げることはできなくて。

そんな私の耳に、優しい声が聞こえる。

ゆっくりと顔を上げると、驚いたように目を見張るレオナルド様の顔があった。

長く艶やかな黒髪に、金色の瞳。見慣れた私ですら見惚れそうになるほど整った美貌を持つ彼は、私の雇い主であり王宮魔法使いレオナルド・マリエル様だ。

いくつもの二つ名を持ち、その魔力と実力からこの国の筆頭魔法使いと呼ばれている。この世界で、黒髪の人間は恐れられる。それは生まれながらに精霊さんと契約を交わしている証であり、同時に膨大な魔力を持つことを示しているから。

膨大な魔力は、制御できなければ天災になる。

特に子供の頃は暴走する危険性が高く、それゆえに疎まれるのだ。

前世が日本人だった私からすると黒髪は懐かしく思いこそすれ、恐怖心を抱くことはなかった。

けれど、それは非常に珍しいことだったそうで、幼い頃は黒髪と恐れられ、成長し魔法使いとして名を上げてからは手のひらを返したように女性たちに群がられて辟易していたというレオナルド様は、わざわざ私を指名して仕事の依頼をした。

かつての自分と同じように、膨大な魔力に苦しむ養女——ジルの母になってほしい、と。

私に向けられた信頼が嬉しくて、けれど共に過ごすうちに私の中でレオナルド様の存在がどんどん大きくなっていった——いつしか恋をしてしまった。

前世ごと私を受け入れて、あの人を好きな私のままで構わないと言ってかれて、それでいて私を自分の唯一にしてくれたのだ。

『過去も罪も後悔も全部共に背負うから、誰かを選ぶ時は僕を選んで。他の誰でもなく、僕を』

ずるいと思う。こんなことを言われて、自分の気持ちをごまかし続けるなんてできる

はずがない。

その言葉にちゃんと応えようと、こうして気合を入れた服を着てみたりして……あれでも待って、反応がない。

「あの、レオナルド様」

「……ん」

声をかけてみたけど反応が薄いというか、なんか不安になってきたんだけど。

「に、似合いません、か？」

みつともなく声が震える。今すぐ部屋に飛び込んでいつもの服に着替えたい。

ぎゅっと目を閉じて返事を待っていると、頬にふわりとなにかが触れる。

「……髪、いつもと違う」

目を開けると、レオナルド様が私の髪に触れていた。持ち上げられた髪を梳くように、長い指先が動く。引つかかることなくさらりと滑り落ちる髪に、手入れしなくてよかったなあなんてどこかずれたことを考える一方、心臓がありえない速度で鼓動を刻んでいた。

「下ろしたの、見られたくないって言ってたよね」

「そ、そうです」

「これから城に行くのに、なんで」

あ、れ？　なんかレオナルド様、ちょっと不機嫌？

予想外の反応に対応できず固まっていると、レオナルド様は長いため息の後に私を抱きしめてきた。

「いつも可愛いけど、今日はいつも以上に可愛いし。髪下ろしたくないって言ったのに。なんで」

「あ、あの」

「誰に見せるつもりなの」

貴方です！　って、言えればいいけど、さすがにこの状況で言えるほど私神経図太くない!!

「か、可愛い、ですか？」

精一杯の気持ちでそう聞くと、私を放したレオナルド様は洪々といったように頷いた。

「可愛い。よく似合う」

「あの、えっと。嬉しいですよ」

多分顔は真っ赤だけど、素直に言葉を口にする。

「レオナルド様に、そう言ってもらえたらいいなって思っていたので」

間。

いっぱいいっぱいな私はそれ以上にも言えなくなってるし、レオナルド様はまた目を丸く見開いて固まっているしで、誰もなにも言わないし動きもしない中、最初に行動したのはミリスだった。

「とりあえず、そろそろ時間ではありませんの？」

「あ、そうでした。レオナルド様の準備ができていたのでしたら、早く行かないと」

うっかりしてたけど、城から呼ばれているんだもの。

浮ついた気持ちで忘れそうになるとか、私らしくない。

「……そうだね」

「マスター、女性が着飾っているのにケチをつけるのはよろしくありませんわ。心配なら、そばにいて離さずにいればいいだけですわ」

「ん。そうする」

ミリスの言葉に頷いたレオナルド様が、いつものように私の手を取った。

「行こうか」

「はい。じゃあミリス、行ってきます」

「行ってらっしゃい。お夕飯の準備は私がしておきますから、ご安心くださいませ」

そう言ったミリスが私にだけ見えるように、小さく口を動かす。
『がんばって』って。

うん。ミリスにはこれ完全に私の気持ちバレてるよね。バレてないほうがおかしいよね！

恥ずかしいのともう逃げられないと悟ったせいか、妙に落ち着いた気持ちのままレオナルド様と一緒に庭へ出る……庭？

「レオナルド様、どうして庭に？」

「僕の庭から、城の近くまで道が通じてる。今日はそこを通過しようと思う」

そうして歩いた先、庭の奥にあったのは石造りの白い小さな四阿^{あずまや}だった。

四阿^{あずまや}の中心に立ったレオナルド様が私を抱き寄せる。

どきんと胸が跳ねるけれど、足元が輝きだしてすぐにそれどころじゃなくなった。

「目を閉じて、リリー」

混乱する私の耳に聞こえた声。反射のように目を閉じると、ふわりと周りをやわらかな風が取り巻くを感じる。そのまま体が浮くような感覚に襲われたけど、レオナルド様がしっかりと抱きかかえてくれているおかげなのか、怖さは全くない。

「もういいよ、目を開けて」

目を閉じていた分、長く感じたけれど、きつと時間にしたら数秒。

そっと目を開けると、そこに広がるのは色とりどりの花が風に揺れる光景だった。

明らかにレオナルド様の庭ではないけれど、疑問を口にするよりも波打つ花々の美しさに声もなく見惚れる。視界一面を覆うような花は、手入れされているもののどこか自然のままであり、観賞用の花特有の煌びやかなものとは違う。もっとささやかな、だからこそ心が落ち着く、まるで陽だまりのような美しさだ。

「綺麗……」

「ここは王立植物園。庭師以外にも、植物と親和性の高い魔法使いが管理していて、僕もあちこち手伝っているから道が繋がっている」

「入り口付近の、一般公開されている区域には何度か行ったことがあります、こんなに綺麗な場所を見たことはありません」

「非公開の場所だからね」

花の間に伸びた細い小道には、やわらかなクリーム色の小石が敷き詰められていて、歩くたびにサクサクと音が鳴る。夢のような光景を堪能する私に、レオナルド様がぼつりと呟いた。

「ここなら、城に入るまであんまり人に会わないから」

「レオナルド様」

「ごめん。可愛いから。見せたく、なくて」

それは、もしかしくなくても、嫉妬しつとというやつですか？

声には出さずに心で聞いかけて、多分間違っていないだろうそれに赤くなりつつ、浮かぶ笑みを抑えられない。

「せっかく綺麗なのに。ごめん」

「いいえ。レオナルド様が可愛いと褒めてくださったので、充分です」

「ん」

髪から覗くのぞレオナルド様の耳が赤い。

気恥ずかしさに沈黙しても、なんとなく居心地が悪くないのはなんでだろう。

そうして黙ったまま歩くうち、城が遠目に見える分かれ道でレオナルド様が足を止めた。

「リリー、ちょっと寄り道しよう」

「え？」

「今しか見れない花がある……リリーに見せたい」

それほど遠くないから。そう言われて歩いていくと、視界をなにかが横切った。

はらりと舞うそれには、見覚えがある。

「この国で、ここにしかない花なんだ」

ゆるやかな丘になっているせいでまだ木は見えないけれど、風に乗って踊る花びらは、懐かしいものにしか見えない。

先ほどまでとは違う意味で高鳴る胸に、気がはやる。

そうして見えてきたのは、満開に咲き誇る桜の木だった。

「東の国にある、春告げの花というそうだよ。セーユを持ってきた人も東の国だったから、もしかするとこの花にも見覚えがあるんじゃないかと思って」

「……ええ。知ってます」

ぶわりと胸に押し寄せてくる、懐かしさ。

前世、家族でお花見をしたこと。花びらの舞う並木道を歩いて、学校に入学した日のこと。

新しい日々の始まりに胸をワクワクさせたり、過ぎた日を思い出したりすることもあつたな。

でもなにより、生まれたばかりの弟を抱く母の笑顔と、病室の窓から見えた満開の桜を覚えていた。

節目節目の記憶に残る、一番好きだった花。
幸福な記憶を次々呼び起こされて、言葉に詰まる。

「私の、一番好きな花です……」

レオナルド様から離れて、そっと木に触れる。ざらりとした表皮は少しだけひんやりしていて、見上げると空がやわらかな薄ピンクに染まっていた。

「リリーは、この花をなんて呼んでいたの？」

「桜、と。同じように春に咲く花で、国中いたるところに植えられていて、風に散るさまを桜吹雪と呼んで、それを見るのが毎年の楽しみでした」

「……誰とって、聞いていい？」

小さな呟き（つぶや）に振り向くと、こちらをまっすぐ見つめるレオナルド様がいた。

「ごめん。でも、駄目なんだ。リリーがいつも以上に可愛くて、困らせるとわかっているのに抑えられなくて」

そのまま強く抱きしめられて、私の視界は桜の色とレオナルド様の黒髪で埋め尽くされる。

どんな顔をしているのだろう。わからないまま、レオナルド様の声が聞こえた。

「ごめんね、リリー……君が好きだよ」

届く。響く。揺さぶられる。

まっすぐに伝えられた言葉が、想いが、いつだって私の心に伝わってくる。

嘘偽りないレオナルド様の言葉だから、誰よりも温かくて優しいこの人の言葉だから、私は前を向ける。

「謝らないでください」

今なら、ちゃんと返せるから。私の中にいつの間にか育っていた気持ちを、口にしよう。

「私も、レオナルド様が好きです」

好き。このたった二文字を言うのに、どれだけためらったことだろう。

レオナルド様がくれた気持ちを、きちんと返したい。そして一緒にこの先を、歩いていきたい。

そう思っレオナルド様の背中に回した手に力を込めた。

はらはらと桜が舞う中で、大好きな人に抱きしめてもらえて、なんて幸せなんだろう。じわりと涙がにじんだその瞬間、勢いよく体を引き剥がされた。

えっと思う間もなく両肩を掴まれて、でも視界にはうなだれたレオナルド様の頭頂部が見えて……え？



「レオナルド様？」

「ちよつと、待つて。待つて」

「え、待つてください、なんでそんな」

「いいから待つて」

お互いに待つてと口にして、流れた沈黙。

あれ、私ちゃんと言えてたよね？ 誤解された？

それとも、私の気持ちなんて迷惑だった、とか……

どんどん不安になっていく気持ちと裏腹に、時間だけが過ぎていく。

もう一度声をかけようとした時、風が吹いて気がついた。

「……レオナルド様、顔が真っ赤です」

一瞬だったけど、確かに見えた。真っ赤だった。

えと、つまり、喜んでもらえてる……で、いいのかな？

そう思ったら、気持ちがちよつと楽になった。

「待つて。思考が、まとまらないから」

私から手を放して、片腕で顔を覆うレオナルド様。

いつもの冷静さが失われた、はじめて見る姿に、自然と笑みが浮かんでくる。

だつてこれ、どう見ても嫌がつてはないよね？

「ちゃんと、聞こえましたか？」

「……聞こえ、た、から。待つて」

はーっと息を吐いたレオナルド様が腕を下ろす。あらわになった顔はやっぱり真っ赤で、どこか泣き出しそうな不機嫌そうな、それでいて笑い出しそうなんとも言えない表情になっていた。

「確認ね。僕は、リリーが好き」

「はい」

「で、リリーも、その……」

「はい、レオナルド様が好きです」

あれだよ、多分これ自分よりパニックな人を目の前にすると冷静になるってやつだ
と思う。

思っていた以上にレオナルド様が動揺しているせいか、すっごく落ち着いている自分がいるもの。

「その、好きってつまり」

「一人の男性として好きです」

あーとか、うーとか、真っ赤なまま唸^{うな}っていたレオナルド様に微笑^{ほほえ}みながら答えると、
レオナルド様は、でも、と続ける。

「……あの人のこと、好きなんだよね」

「好きでした。でも、それはあくまで大事な思い出です。それに昨日、本人と話しまし
たし」

笑って言ったら、きょとんとされた。

「本人？ 昨日？」

「ああ、言う暇^{ひま}がありませんでした。ロクシエの外交官、リオネロ・ケイトナー伯爵
が、前にお話しした前世のあの人でした」

呆然と口を開いたまま固まるレオナルド様。ああ、そりゃ驚きもするか……私だつて
レオナルド様の過去の恋人とか現れたらつて思うだけでショックなもの。

「……大丈夫？」

「え？」

ややあつてレオナルド様は、心配そうな顔でそう言った。

「ずっと好きだった人が、他の人と一緒にいるのを見て、辛くなかった？」

金色の瞳に浮かぶのは、私を氣遣う色だけ。

本当に、優しすぎるほど優しい人だなあ、と笑顔で頷く。

「まったく、辛いくないですね」

「無理してない？」

「してません」

好きだった。大切な人だから、その幸せを願っていた。

その気持ちに嘘はなくて、でも、それだけでしかなかった。

忘れられたら寂しいと思う気持ちはあっても、あの人が他の誰かと恋人になることに對して嫌だと思ったことはないな、と思い返す。

「変なの」

「なにが？」

「いえ、ちょっと。あの人が他の女性と一緒にいるのは悲しくもなんともないというか、むしろ幸せになってほしいなとか嬉しいなって気持ちしかないんです。でも、同じことがレオナルド様だと嫌だなって。私以外の人と一緒にいたら嫌だな……って……」

言ってて気づいた。

私、これ声に出してるよね？ 心の中で思ってたこと、そのまま口に出してるよね？ おそろおそろレオナルド様を見ると、頬を染めて目を泳がせている。

うん、ごめんなさい、私も恥ずかしすぎるので今すぐ逃げ出したいです！

「えっと、その。リリー以外はいらないし、僕も嫌だから」

安心してね、とはにかまりました。

その表情はじめて見ましたよレオナルド様、破壊力が半端ないです、心臓が持ちません。

ああ、でも。こうしてみると私って、思った以上に恋愛に對して初心というか……ほぼ初心者、みたいな？

色々なはじめての感情をレオナルド様と知っていくのかなと思うと、それは嬉しいし楽しみなだって、私も自然と笑うことができた。

「レオナルド様」

「ん？」

「私、前世では十六歳という今より若い年齢でした。恋人がいたと言っても、ほぼなにわからない状態です。だから、その。なにか失敗しても、許してくださいね」

「……ん。僕もわからないことだから、間違ったらごめん」

これからも、よろしく。

そう言ったレオナルド様に笑って頷く私の頬を、優しい風が撫でていった。

「まずはジルとあの子たちを確認しに行く」

「わかりました」

王立植物園を抜けた私たちは、魔法省の一角に向かっていた。

堂々と手を繋いで歩く私たちにびっくりしたような視線が向く。正直言って、かなり恥ずかしい。でも、もう後ろめたさを感じる必要はないんだって思うと、それはとても嬉しかったり。

あ、ちなみにここに来る前に髪の毛を結び直しました。その……他の人にはあまり見せないでほしいと言われたので。

ハーフアップにしてたりボンをほどいて、左耳のところ一つに結び直したから、普段と印象はあまり変わらないはず。

「その髪型、一緒にリリーのお母さんに会いに行つた時みたいだね」

「ああ、そう言えは」

「また、行かないとね」

なにか母に会いに行く用事があったかなと思っていると、小さな声が聞こえた。

「大切な娘さんを、僕にくださいって言えばいいのかな……」

さつきよりも明らかに小さくなった声は、私に聞かせるつもりがないんだとすぐにわかつたけど、聞こえちゃったし内容があれだしで、今私の顔は間違いなく真っ赤です。いやだって、まるでそれって結婚の報告みたいじゃない！ 前々から誤解されそうなことを言われては注意してたけど、これからはその必要もないわけで、あれ、でもそうすると私この赤面もののセリフを聞き続けることになるの？

恥ずかしい、でもそれ以上に嬉しい。嬉しすぎて、でも恥ずかしい。

半歩先に行くレオナルド様はこの顔を見られなくてよかったと思いつつ、周りにもあんまり見られたくなくて顔を隠すようにうつむいて歩いていくと、今まで来たことがない扉に辿り着いた。

レオナルド様が軽くノックをする際に、大きく息を吸って、吐いて。よし、いつもの私に戻ったかな。

「レオナルド様、こちらの部屋は？」

「魔法省の救護室。個室になって他より魔法に対する結果が強い……魔法を使ったまま気絶する人がいたりするから、それ対策」

「なるほど、だからあの子もここに？」

「そう。入るよ」

レオナルド様が声をかけて軽く押すと、扉がゆっくりと開く。
「お父さん、お母さん！」

明るい光が差し込む中、ジルが真つ先に私たちを見て顔を輝かせた。

ふわふわと波打つストロベリーブロンドに、空より青い大きな瞳。将来美人になること間違いなしの可愛らしい顔に華奢な手足、天使のように可愛らしいジルは、レオナルド様だけでなく私のことも親として慕^{した}ってくれている。

「あのね、さつきね、ジェイドになったんだよ！」

椅子から勢いよく立ち上がってぱたぱたと大きく腕を振り、嬉しくてたまらないといった様子で頬を紅潮^{ほお}させて笑うジルは、それはそれは可愛らしいんだけど、ジェイドになった、って？

「僕の、名前です」

小首を傾^かげる私たちに声をかけたのは、この部屋にいたもう一人——レオナルド様と同じ黒髪の少年だった。

先日ジルと契約した光の精霊リオンを肩に乗せた少年——ジェイドは、たくさんの枕に背中を預ける形でベッドに起き上がっている。彼は膝^{ひざ}の上で安心したように眠る赤い毛並みの子犬を、優しい手つきで撫^なでていた。

「君は……昨日の。そう、ちゃんと保護してもらえたのね、よかった」

ホッとしてそう言っていると、ジェイドは深い緑の瞳を私に向ける。

「はい。ジルとリオンが僕たちにたくさん力を分けてくれたので、一晩でここまで回復できたそうです……あんなことをした僕たちに、皆さん優しくしてくれています」

あんなこととは、昨日までレオナルド様たちが追っていた、国のあちこちで起きた子供たちの行方不明事件のことだ。

この世界では誰もが魔力を持っている。魔力は血液と同じように体を巡^{めぐ}り、それとだけ外に出せるかによって、魔法を使える範囲が決まるのだ。魔法は使えなくとも魔力を外に出すだけならほとんどの人ができるため、日常的に活用されている。

ちなみに私は珍しい魔力ゼロ体質で、魔力を一切外に出すことができない。そんな私でも一定の動作で起動するようあらかじめ魔力が込められた魔石や、魔力が必要な魔法具を起動できるようにする、レオナルド様に作ってもらった特別な腕輪があるおかげで問題なく過ごしている。

今行方不明になっていたのは、その魔力が多い子供たちだったそうだ。

身分に関係なくあちこちで子供たちが消えるという事件を追ううちに、ある『精霊狩り』が関わっていることが明らかになった。

精霊狩りとは、精霊でありながら他の精霊さんを捕らえ、吸収しようとする存在。なんらかの欠陥を抱え、自分を保つために魔力が必要でそんなことをするのだそうだ。

そして事件に関わっていた精霊狩りこそ、少年の膝で眠る子犬——ユトであり、その契約者がジェイドだ。

精霊という尊い存在への加害行為は、大罪にあたる。

だから彼らは本来国に捕らえられ処罰されるべきなんだけれど、簡単に加害者と言い切ることは難しい状況にあった。

ユトは元々精霊狩りではなかった。しかし、監禁されたジェイドの命を救うために魔力を必要として、他の精霊さんたちを吸収していたのだ。

そうせざるをえないほどにユトを追い詰め、精霊狩りに仕立て上げた犯人——彼らは行方不明事件の黒幕でもあった。

事件が解決したおかげで、子供たちと共にジェイドとユトも保護されたが、事件の黒幕のうち二人は逃げてしまっている。

その状況に私も関わっていたため、事情聴取のためにこうして城へやってきた。

この子たちのしたことは、簡単に許されることではないかもしれない。

けれど、できればその罪を重いものにはしないでほしいと思ってしまう私がいる。

加害者であると同時に、間違いなく被害者でもあるのだから。

「さつきジルが『ジェイドになった』と言っていたけれど」

「はい。僕には名前がなかったので……正確には、忘れさせられていたようなのですが」

「忘れさせられた？」

不穏な言葉に、レオナルド様の声が低くなる。

そのまま近づいていくレオナルド様に、少年は緑の瞳をそっと伏せた。

「魔法をかけられた痕跡があるそうです。そのせいで記憶が改竄されて、色々なことを忘れさせられているのだと言われました」

その言葉を受けて、レオナルド様がジェイドの頭に手をかざす。ややあって、苦みを多分に孕んだ、低い声が口からこぼれた。

「……たちの悪い魔法の痕跡だ」

「今だとそうなのかなって思うけれど、あの時はよくわかりませんでした。でも、僕は魔法使いにするためには必要な教育だと言われて」

「魔法使いにする？」

「よくわかりませんが、余計なことは覚えていなくていいと。魔法のこと、仕えるべき

人だけ覚えていれば、あとは他の人が僕に指示を出すからと」

「……まさか、魔法使って傀儡かいらいの魔法使い？ そのために精霊狩りをさせていた？ ふざけるな、こんな子供を捨て駒ごまとして使うつもりだったのか!？」

レオナルド様が怒ってる。その背中から、握り締めた手から、言葉にならない怒りが伝わってくる。

それにしても妙みょうな言葉がたくさん聞こえた。

ええと、傀儡かいらいの魔法使いにするために記憶を忘れさせられて、精霊狩りをやらされた？

「……人工的に精霊狩りを作り出して、さらにそれを操る傀儡かいらいの魔法使いを育てようとした、の？」

「リリー」

「あ、ごめんなさい。よくわからなくて」

「いや、僕もどう考えればいいのかなんて思ってたから。多分それで合ってるんだと思う」

うわー、最低。だって傀儡かいらいってことは、自分の意思を持たせるつもりがないってことでしょう？ おまけに無理やり精霊狩りにさせるとか、もう自分たちのことしか考え

てないって意識がありあろうかがえるよね。

あれ、でもそれならどうしてあの時この子は奪い返されなかったんだろう。そこまでして育てた逸材を簡単に手放すのはおかしいよね？

そんな疑問が顔に出ていたのか、男の子は子犬の背中を撫なでた。

「逃走防止の魔法がかかっていたのを、ジルが解いてくれました。リオンがいたから、転送魔法も相殺そうさくされてここにいられています」

「ジルとリオンが？」

「ジルが魔法を解けたのはたまたまだし、リオンがいたのは魔力をあげるためだったの。でも、光の精霊がいたら転送魔法が発動できなかったんだって」

「おそらく転送魔法には闇の魔法が使われていたんだろう。転送魔法は繊細せんさいで難しくて、僕たちにもまだ使えない。リオンはまだ小さい精霊だけど、転送魔法を妨害するには充分だったってことだね」

「……僕を引き取ってくれる魔法使いのご夫婦が、名前をつけてくださったんです。僕が目が、この石と同じ色だからって」

見せてくれたのは首から下げられた緑の石のペンダント。その石にちなんだジェイドと名付けたことは、翡翠ひすいかな？

「いい石だ。翡翠^{ジェイド}は強い魔力にも耐えるし、幸運を祈る意味を持つ。君を守る石になるだろう……君を引き取る魔法使いはロードスタチカ」

納得したように頷^{うなず}くレオナル様。

ロードスさんは、前にどちらがジルを引き取るかでレオナル様とひと悶着^{もんちやく}あった人だ。ジェイドを助けた時に奥さんのロザンナさんと一緒にいて、私が二人にジェイドを守ってくれるよう頼んだんだよね。それが縁だったのかな。

でも、どうしてロードスさんだってわかったんだろう？

疑問に思っ^かてレオナル様を見ると、同じくレオナル様を見上げたジルが不思議そうに首を傾^{かし}げた。

「どうしてお父さん、ロードスさんだってわかったの？」

「その石だよ。彼の生まれ故郷では幸運が訪れるよう願って、生まれた子供に翡翠^{ジェイド}を与える風習があるんだ」

「幸運……僕に……？」

嬉し^{うれ}しそうに、それでいてどこか不安そうな顔で石を見るジェイド。

これまでの境遇からすると、複雑な思いになるのも仕方ないのかもしれない。

でも、子供を守るのは大人の役目だし、引き取ると決めた子供にそんな贈り物をする

なんてすごく素敵なことだ。

あの時、気を失ったジェイドを案じていた二人を思い出す。

ジェイドの境遇に怒りをあらわにしていたロザンナさん、不器用な手つきで優しく撫^なでていたロードスさん。あの二人なら、いい両親になっ^なてくれるはず。

「おや、もう来ていたんですか」

「アラン」

軽いノックと共に姿を現したのは、私とレオナル様を呼び出した王太子——ではなく、その側近にして次期宰相と目されているアランだった。

穏やかに見えるけど仕事となると容赦^{ようしや}ない人で、何度無茶振りをされたことか……思わず遠い目になっ^なてしまう。嫌いじゃないんだけど、ついね。

幸いそんな私に気づく様子はなく、アランは右手に持った書類をひらりと振って見せた。

「ちょうどよかった。この件の正式な処分が決まりましたよ」

その言葉に身を固くしたのはジルとジェイドで、不穏な気配を感じたのかユトも目を覚まして辺りを警戒するように首を動かす。

「……あなたは？」

ゆっくり息を吸い、落ち着いた声でアランを見上げるジェイド。ただ、その手はシーツを固く握り締めている。それでも動揺を表に出さぬよう努めている姿は、感心を通り越して痛々しい。

そんなジェイドを心配してか、ユトもアランに向かって身構えていた。

「私はアランガルド・リンダール。王太子の側近です。貴方の処分について伝えに来ました」

対するアランは仕事用の表情ではなく、少し優しい表情でジェイドに話しかけている。

子供相手だからなのかな。本性を知っている身からするとむしろ怖いんだけど。

ただ、きつと実刑が下ることはないと思う。昨日の時点で王太子は、魔法省がジェイドを王宮魔法使いとして育てるならば罪を問うことはしないと明言していた。そのほうが国益になるからと。

私も、多分レオナルド様も、そう思っていたからなにも言わなかった。

けれど、ジルは違ったみたい。

「だって、ジェイドもユトも悪くない！」

ジェイドたちを守ろうと両手を広げて立ち塞がるジルに、さすがのアランも目を丸く

した。

「ジェイドは、ジェイドはジルと一緒にだよ。閉じ込められて、人を傷つけないのに傷つけて、どうしたらいいのかわからなかった。逃げることにすら、考えられないの。知らないから、世界はみんなジルたちを嫌いだって思ってた」

必死に言い募るジルの目には、うっすらと涙が浮かんでいる。

ジェイドと事情は違うけれど、ジルもまた強い魔力ゆえに酷い扱いを受けていた。はじめて出会った時には怯える様子も強くて、魔力を使うことに恐怖もあった。

だから、誰よりもジェイドの気持ちかわかるのだらう。助けたくて仕方がないんだ。

「ジルには、お父さんもお母さんも、シドさんたちもいるよ。でも、ジェイドには誰もいなかった。やつとお父さんとお母さんができたのに、離れ離れにさせないで。ジル、もつとがんばるから。だから……」

とうとう泣き出してしまったジルに、珍しく本気で困り果てた様子でこちらを見るアラン。

「どうしましょう。まるで悪者にされているような気がするのですが」

「完全に悪者扱いね」

「そんな……」

思わず素でつっこむと、アランはがっくりと肩を落とす。その様子に苦笑しつつ、私はジルの頭を撫でた。

「ジル、ジルの気持ちはちゃんと伝わってるわ。大丈夫」

「おかあさん……」

あーあ、可愛い顔が涙と鼻水でぐちゃぐちゃだ。

ハンカチで顔を拭い鼻水をかませると少し落ち着いたようで、小さくすんつと鼻を鳴らす。

「ジル」

ふいに、ジェイドが口を開く。

深い緑の瞳に穏やかな光を宿し、ジェイドは大人びた微笑みを浮かべた。

「守ろうとしてくれて、ありがとう。でも、僕たちがやったことは罰せられるべきものだ。たくさん迷惑をかけて、人を傷つけた。なにより、僕たちはどうしても償わなければならない。多くの精霊たちを消滅させてしまったことは、責められるべきことだから」

「ちがう！」

大声を上げたジルは勢いよくジェイドに抱きつく。

「たしかに、精霊たちを失わせてしまったことは怒られなきゃいけないかもしれない、でもそれは人じゃなく、精霊たち自身がするはずのことでしょう？ だからここで処分されるのは、おかしいよ！」

あ、これ完全に処分って言葉を勘違いしてる。そうよね、処分ってだけ聞いたら、よくない想像をしてもおかしくないもの。

「アランー、うちの可愛い娘が泣いてるんだけど？」

とりあえず遠回しに安心させるべく、少し怒ったような表情でアランを睨む。すると心外だと言わんばかりの顔でアランが睨み返してきた。

「どうして私を責めるのですか」

「そりゃあ、今この部屋で明らかな悪者だもの。紛らわしい言葉を使うから誤解されるのよ」

そんな鳩が豆鉄砲を食らったような顔をしないではいいのだけれど。

「わかりやすくかみ砕いて言いなさいな、この子たちにもきちんと内容が伝わるように」

きょとんとした子供たちに微笑みかけてからそう言うと、アランが困ったような顔をした。

「無理ですよ。今の言葉だけでこんなに混乱させてしまったのに、きちんと伝えられる自信がありません……というわけで、リリー」

「え？」

ポンツと書類を私に持たせたアランは、さっきの困り顔がどこへやら、満面の笑みを浮かべた。

「読んでください。リリーの言う、わかりやすい説明で」

「仕事を人に押しつけるのはどうかと思うのだけれど」

いや、ふふって笑われてもね。一応これ、部外者に読ませちゃいけないものでしょう。どうせそう言ったら、事件の関係者だから部外者じゃないとか屁理屈こねるんだろうけれど。

仕方ないので書類をめくり、ざっと目を通す。それからジェイドたちのほうを向いて、大丈夫だと微笑^{ほほえ}んで見せた。

「心配する内容じゃないわ。ジェイドは直接人を傷つけたわけじゃないし、そもそも捕まって逃げられないようにされていたでしょう？ だから、今回ジェイドとユトに対して罰は与えませんって書いてあるの」

「お母さん、本当？」

心配そうなジルに笑って頷^{うなず}く。昨日王太子が言った通りの内容のままだもの。

「ただし、ユトが他の精霊さんを消滅させてしまったことと、ジェイドには大きな魔力があることから、ちゃんと力を制御できるように魔法省で勉強しなさいって。そして、大きくなったら魔法使いになってお仕事をしてくださいと続いているわね」

「魔法使いになって、仕事をする……それは、僕を罰しない代わりに、ですか？」

その言葉にどう答えたものかとレオナル様に視線を向けると、ゆるりと首を振った。「そうじゃない。君がちゃんと力を制御できるようになっても、黒髪である以上厳しい目を向けられることが予想される。でも、魔法省には僕がいるし、魔法使いにとって黒髪は忌避^{きひ}するものじゃない」

おそらくはジェイドの膨大な魔力をこの国が手元に残すための条件。でも、ある意味では黒髪を守るには魔法省がうってつけという意図も確かにあるはず。

なんだかんだ、王太子は虐げ^{しいた}られた人に対して優しいところがあるからね。

じっとレオナル様を見上げるジェイドは、やがてこくりと頷^{うなず}き、アランを見た。

「わかりました。ただ、それに一つだけ、条件を追加していただくことはできますか？」

「条件？」

「はい。僕たちは多くの精霊たちを消滅させています。どんな形になるかわからないけ

れど、その償いは必ずしなければならぬ。そのために、魔法使いを続けられなくなることもありえます。その時は、魔法使いをやめてもいいと許可が欲しいです」

「それは、私の一存ではなんとも」

そう言いかけたアランを止めたのはレオナルド様だった。

「いいよ。その時がきたら、僕に言って」

「マリエル殿、なにを勝手に！」

「昨日も言ったでしょう。精霊狩りの件で、彼らを裁く権利があるのは精霊だ。僕たちが口を出せる範囲じゃないし、そこに僕たちの事情は関係ない」

きっぱりと言いつけるレオナルド様にぐつと言葉を呑み込むアラン。

確かに昨日、同じことをレオナルド様は言っただけ、王太子も認めていた。

ただ、アランの立場からすると簡単に認めたくない内容なのも確かだ。いついなくなるか分からない魔法使いなんて、困るよね。

「ただ、君もちゃんと理解しておいて。君がいなくなったら悲しむ人がいるってこと。

君を引き取ると決めたロードスたちも、君を守ろうとしたジルも、僕たちだって、君がいなくなったら悲しく思う」

「レオナルドさん」

「精霊が償いになにを求めるかはわからないけれど、一人で抱え込んで暴走しないように。自分を大事に思ってくれる人が悲しむ顔を見るのは、とても辛いよ」

そう言っただけ、レオナルド様はこちらに振り向き、いかにも大事と言わんばかりの表情でこちらを見つめる。

いや、どうしてそこで私を見るんですか、レオナルド様。言ってることはとてもいいことなのに、いたたまれなくなるのでこちらを向くのはやめていただきたいのですが。ほら、アランが呆れたような顔をしているじゃないですか！

「忘れないで、もう君は一人じゃない」

「……はい」

小さく頷いたジェイドが胸元のペンダントをぎゅつと握ると、その手にジルがそつと触れた。

「お父さんの言うとおりの。もう、一人じゃないんだからね！」

そう言ったジルに、やっとジェイドが子供らしい笑みを浮かべる。

今までの環境のせいで、すぐに信じるのは難しいかもしれないけれど、いつか一人じゃないと実感できる日がくるといいな。